

論文（査読付）

「読書」を再定義する試み

「読書の重層性」に基づく新たな理論的枠組みの構築に向けて

増田芽衣

Redefining “Reading”

Toward a New Theoretical Framework Based on the Multilayered Nature of Reading

MASUDA Mei

Abstract

The debate surrounding “Katsuji Banare”—that is, the conventional wisdom that young people are turning away from printed materials—is based on an unchallenged assumption: namely, that “reading” means silently reading a printed book alone. In this paper, I argue that this definition is not universal but stems from the historical formation of modernity, and I propose redefining “reading” through its “multilayered nature” (*dokusho no jūsōsei*). Specifically, contemporary reading is distributed across multiple coexisting layers, such as print media, digital media, audio, and social media. Therefore, reading is redefined as a multilayered practice constituted within the relationships between multiple reading devices. It is demonstrated that the so-called “decline of reading” is also influenced by this narrow definition.

In other words, it is not a generational decline but rather stems from structural changes in the media environment.

1. 「読書」とは何か

「若者の活字離れ」という言説は、「本を読まなくなった若者」、「スマートフォンに奪われた読書時間」、「出版市場の縮小」といったもはや自明ともいえる現象を根拠として語られ、もっぱら「若者が読書をしない」という意味で用いられている。しかしこれは、かならずしもスマートフォンの普及以降に限ったものではない。

「朝日新聞クロスサーチ」（朝日新聞の記事検索データベース）で「若者の活字離れ」というワードを検索したところ 1987 年 4 月 17 日付夕刊 1 面の『『雑高』のかげり』という記事が検出される。80 年代に雑誌の創刊ブームがあったが、そこに陰りが見えてきたという内容だ。「若

者の活字離れ傾向なども手伝った書籍の不振を、出版界は雑誌の売上でカバーしようとしているのだ¹。という分析が書かれていた。

読売新聞の「ヨミダス」(読売新聞の記事検索データベース)では、1984年1月21日付朝刊11面の「WHAT 入学試験⑤ 論文の関門 若者の活字離れに対抗」という記事が検出される。大学入試に論文を課す大学が増え、それが「若者の活字離れ」に対抗したものだ、という内容である²。すなわち、少なくとも1980年代から「若者の活字離れ言説」は続いているのである。

さらにこの言説は、現在もなお反復されている。稲田豊史『本を読めなくなった人たち』(2026)はその一例である。ただし稲田自身が一か月に一冊も本を読まない層は、若者に限らず国民全体で、直近では約6割、それ以前からも同様の傾向があると述べている。「活字離れ」は、近年の若者に固有の現象とは言い切れないのである。

私たちが「本を読む」と言う時、多くの場合、紙の書物に向かう個人が声を出さずに文字を追う姿を思い浮かべるはずである。「活字離れ」言説が前提としているのは、まさにこの意味での読書、すなわち〈書物を個人が黙って読む〉という行為にほかならない。だが、第2節で示すように、この読書形式は決して超歴史的なものではなく、近代という特定の時代に成立した、一つの歴史的な形式である³。そして2026年現在、読書はこの形式におさまりきらない多様な姿をとっている。

人々は、電子書籍を画面で読み、オーディオブックを耳で聴き、SNSで他者の引用や感想に触れ、本の要約動画を視聴し、読書会で本について語り、また語られる本を聴いて知る。これらは〈紙・個人・黙読〉という形式からは外れるがゆえに、しばしば「読書」として数えられない。だが、「テキストの内容を受け取り、それについて考える」という点において、これらは紙の黙読と地続きの実践である。読書は今日、複数の異なる装置に分散し、それらが一人の読者のもとに同時に積み重なって併存している。本稿は、この事態を「読書の重層性」と呼ぶ⁴。

ここから、本稿の問いが導かれる。「若者は読書をしているか」と問う前に、私たちはまず「何を読書と呼ぶのか」を問わなければならない。なぜなら、何を読書と数えるかという定義そのものが、「読んでいる／読んでいない」の線引きを、そして「活字離れ」という現象の見え方を、根本において左右するからである。読書を紙の黙読に限定すれば人々は「読まなくなった」と見え、読書を多層的に捉え直せば、同じ事態は「読みの形式が移り変わった」と見える。問われるべきは、人々が読んでいるか否かである以上に、その問いの前提をなす「読書」の定義そのものではないか。

本稿は、この問いに次の順序で取り組む。第2節では、読書が歴史的に構築されてきた行為であることを示し、〈紙・個人・黙読〉という近代的読書形式を相対化する。第3節では、「活字離れ」言説、読書装置研究、リテラシー調査という三つの先行研究の系譜を、「測定や定義が“常識”を構成する」という観点から整理し、本稿が継承する点と越える点を明らかにする。第4節では、本稿の中心概念である「読書の重層性」を、紙・電子・音声・社会という各層に即して理論的に練り上げる。そして第5節で、これらを踏まえて「活字離れ」が読書の狭い定義の産物であり、特定世代に固有の現象ではなく構造的な変化であることを示し、読書を多層

的・関係的な実践として再定義することで、読書論における新たな理論的枠組みを提示することにした。

「活字離れ」という喪失の物語を反復するのも、それを単純に否定するのもなく、その物語が立つ足場——「読書」という言葉の自明性——そのものを問い直すこと。それが本稿の目指すところである。

2. 読書という実践の歴史性

2-1 読書という行為の歴史性

「読書」と聞いて私たちが思い浮かべるのは、多くの場合、〈個人が書物を黙って読む〉様子である。この像はあまりに自明であるため、それが歴史の中で作られてきた形式であることに気づきにくい。だが読書は、人類が文字を持って以来ずっと同じであったわけではない。書物が誰によって、どのような場でどのように読まれるかは、時代とともに大きく変化してきた。

読書の定義が自明でも不変でもないという本稿の出発点は、まず認知神経科学者の研究から確認される。そもそも、読むという行為は、人間にとって生得的な能力ではない。人間の脳には読字のために生まれつき備わった領域は存在しないとメアリアン・ウルフは論じている。私たちは、視覚や言語のために進化した既存の神経回路を転用し、読むたびに脳の配線を組み替えることによって、はじめて文字を読めるようになる。読書とは、生まれながらの能力ではなく、一人ひとりが後天的に習得し、脳を物理的に作り変えることで成り立つ、文化的な発明なのである（ウルフ 2008 : 29-32）。

読むという行為の変化を最も象徴的に示すのが、音読から黙読への移行である。古代から中世にかけて、読むことはしばしば声に出すことであり、読書は聴覚をとまなう、往々にして共同的な営みであった。声を出さずに目だけで読む黙読は、語と語のあいだを分かち書きする書記習慣の定着などを背景に、長い時間をかけて一般化していった。ロジェ・シャルティエとグリエルモ・カヴァッロが編んだヨーロッパ読書史が示すように、読むという行為は、テキストの内容だけでなく、それが記された物質的な形態、そしてそれを読む共同体の慣習によって規定される。同じテキストでも、写本を音読する場と、印刷された書物を個人が黙読する場とは、読書という経験そのものが異なる（シャルティエ＝カヴァッロ 2000 : 3-32）。

さらに見落としてはならないのは、こうした読書の形が、どの時代においても社会のすべての層に一樣に行き渡っていたわけではないという点である。シャルティエが論じるように、ルネサンスから古典主義の時代にかけての「民衆的」な読者は、エリート読者とは異なる書物に、異なる仕方と接していた。読む層と読まない層、また読み方を異にする複数の層は、常に併存してきたのである。「読者」とは決して均質な一つの集団ではなく、歴史を通じて階層化された複数の読者達であった（シャルティエ 2000 : 387-406）。

ここから引き出される含意は重要である。歴史を紐解くと、読書には「唯一の正しい形式」があるのではない。あるのは、その時代の技術と制度と慣習のなかで形づくられた、複数の歴史的な読書の形式である。〈紙・個人・黙読〉という現在の私達が想定する読書形式もまた、そ

うした歴史的な形成物の一つにほかならない。

2-2 活字文化と「読者」の成立

この歴史性を、近代⁵という時代に即してより具体的に見てみよう。今日の読書形式の直接の母体となったのは、活版印刷の普及によって成立した活字文化である。

香内三郎は、17世紀の活字文化を論じるなかで、印刷された書物が単に情報を運ぶ容器物にとどまらず、読み方そのもの、さらには「読者」という存在のあり方を形づくっていった過程を描いている。印刷術は同一のテキストを大量に複製し、不特定多数の手に届けることを可能にした。人々はすぐにそれを読めたわけではないし、読み方も様々であった。しかし徐々に書物は声に出して分かち合うものから、各人が黙して個別に向き合うものへと比重を移し、孤独に読む「読者」が生まれた。香内が「読者」の誕生として論じたのは、まさにこうした、活字文化のなかで特定の読み方と読者像が定着していく歴史的な過程であった（香内 2004）。

ここで確認しておきたいのは、活字文化が単なる技術の産物ではなく、読み方を方向づける一つの装置として働いたという点である。「印刷された書物の普及」という物質的な条件が、黙読という形式を、そして孤独な個人としての読者を、標準的なものにしていったのである。私たちが自明とする読書形式は、この近代の活字文化のなかで歴史的に標準化された、一つの形態なのである。

2-3 日本における〈読書国民〉の形成

同様の過程は、近代日本においても、独自の経緯をたどって進行した。前田愛は『近代読者の成立』において、明治期の日本で近代的な読者がどのように形成されたかを論じた。音読が依然として広く残っていた時代から、活字メディアの普及とともに黙読が広がり、書物や雑誌を個人として読む読者が現れてくる（前田 2001 : 158-159）。読書はもはや一部の知識人の特権ではなく、近代的な国民が身につけるべき習慣として位置づけられていった。

この過程を、メディアと制度の側面からさらに具体的に跡づけたのが永嶺重敏である。永嶺は『読書国民の誕生 近代日本の活字メディアと読書文化』において、明治30年代の活字メディアの展開と読書文化の形成を、「活字メディアの流通、ツーリズム、読書装置の普及という三つの視点から分析し、さらに、この変容過程の帰結として、〈読書国民〉の誕生を提示」（永嶺 2023 : 3）した。

読書は、個人の内面の営みであると同時に、こうした社会的なインフラに支えられて全国的に普及した、近代国民国家の文化的実践でもあった。〈読書国民〉という概念は、読書が個人の趣味であるにとどまらず、近代を生きる国民の標準的な習慣として制度化されていった事態を端的に表している。

明治から昭和にかけて、こうして〈紙・個人・黙読〉という読書の形式が、日本社会において標準的なものとして定着していった。それは自然発生したのではなく、活字メディアと教育制度と社会的インフラの整備のなかで、歴史的に形成されたのである。

2-4 近代的読書形式とその残存

以上の歴史的経緯から浮かび上がるのは、私たちが「読書」と呼ぶ行為が、近代に成立した一つの形式——〈紙・個人・黙読〉という三つの要素からなる形式——に強く規定されているという事実である。紙の書物という物質的形態、それに孤独に向き合う個人という主体、そして声を出さずに読む黙読という形式。この三位一体が、近代以降の「読書」の標準形式となった。

重要なのは、この形式が歴史的な形成物でありながら、いまや歴史性が忘れられ、超歴史的な「読書そのもの」であるかのように受け取られている点である。だからこそ、紙の本を読まないことが、ただちに「読書をしない」とこと同一視される。電子で読み、音声で聴き、他者と語り合う読みは、この近代的形式の枠から外れるがゆえに、しばしば「読書」として数えられない。

本稿が後の節で「活字離れ」言説を検討し（第3節）、読書の重層性を論じる（第4節）とき、その背景には、常にこの近代的読書形式の存在がある。「活字離れ」とは何よりもまず、この形式を唯一の基準として測られた現象にほかならない。したがって、現在の読書状況を問い直すためには、まずこの形式自体を歴史のなかに置き直し、それが数ある読書の形式の一つにすぎないことを見定めておく必要がある。次節では、この近代的読書モデルを暗黙の前提としてきた「活字離れ」言説そのものを批判的に検討する。

3. 先行研究——三つの系譜と「常識の構成」

本節では、本稿の問いに先行する研究を三つの系譜に整理する。第一は「活字離れ」言説そのものを対象とした研究、第二は読書を支える装置に着目した研究、第三はリテラシーを測定する調査に関する研究である。これら三つは別個の領域に見えるが、「測定や定義の仕方が、読書をめぐる“常識”を構成してきた」という視点において通底している。本節はこの三つの系譜に通底する視点の前提となる考え方を明らかにした上で、これらの研究から何を継承し、どのような視点を付け加えようとするのかを明らかにする。

3-1 活字離れ言説の系譜

「若者の活字離れ」は、しばしば自明の事実として語られる。しかし、それが事実としてどう測られ、言説としてどう構成されてきたかを問う研究は、必ずしも多くない。

清水一彦は、『『若者の読書離れ』という“常識”の構成と受容』において、この言説がいかにして“常識”として成立し、受容されてきたかを分析した。清水が示したのは、「若者は本を読まなくなった」という認識が、特定の調査結果の選択的な解釈と、メディアによる反復的な言及を通じて、検証を経ないまま“常識”として定着していく過程である。ここで重要なのは、「活字離れ」が単なる客観的事実の報告ではなく、測定と語りによって構成された言説的な産物だ、という清水の視点である。本稿は、この「“常識”の構成」という問題意識を出発点として引き継ぐ（清水 2014）。

「活字離れ」を測る指標として広く参照されてきたのが、文化庁「国語に関する世論調査」や全国学校図書館協議会「学校読書調査」、出版科学研究所「出版指標 年報」などである⁶。増田が整理したように、2000年代以降はPISAやPIAACといったOECDの国際学力・成人力調査も、読解力をめぐる議論に大きな影響を与えてきた。第一次・第二次のPISAショックや、2005年の文字・活字文化振興法の成立は、「読解力の低下」「活字離れ」への危機感を背景としていた（増田2026：263-273）。

第一節で触れた稲田の指摘を、ここでデータに即して具体的に見ていく。稲田豊史『本を読めなくなった人たち』（2026）は、倍速視聴に象徴される効率志向（コスパ・タイパ）が読書にも及び、かつて読めた人が読めなくなりつつあると論じた。稲田は、あとがきにタイトルを『本を読めなくなった人たち』とした理由として「本人の意志や能力の欠如によって不読なのではなく、身を置いている社会の変化——非読社会化——によって、『読めない体』になってしまった側面もあるのではないか、というニュアンスを込めた。」と記している（稲田2026：279）。本稿は、この稲田の議論を、現在進行形の「活字離れ」言説の一つの達成地点として位置づける。

ただし注意すべきは、稲田自身が、文化庁の令和5年度「国語に関する世論調査」を引き「16歳以上の日本人の62.6%は1か月に1冊も活字の本を読まない」と記しつつ、同時に以前から一定割合の日本人は本を読んできていない、とも書いている点である。実際に、同調査の結果「1か月に読む本の冊数」（図1）をみると、それが明らかである。

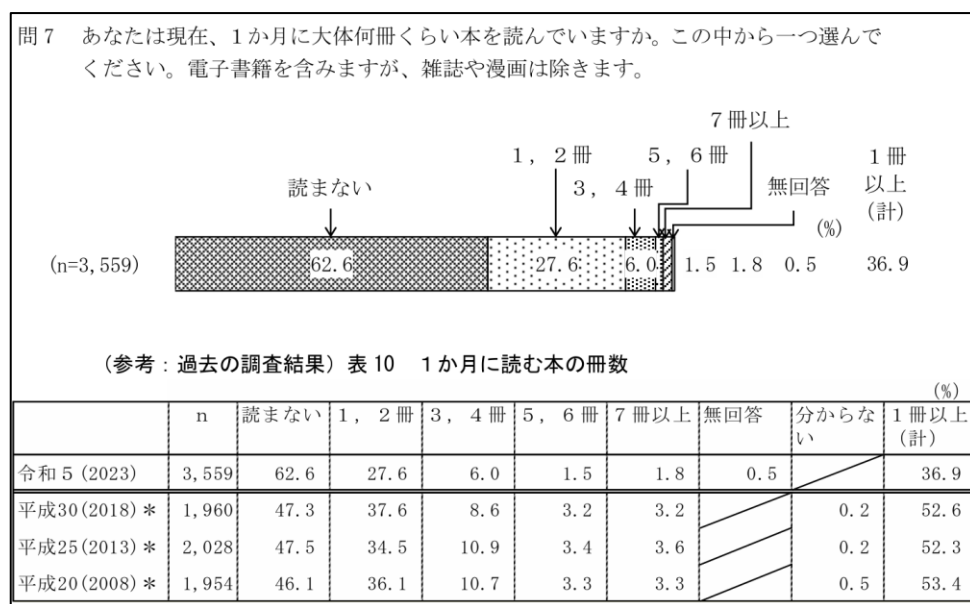


図1 1か月に読む本の冊数

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査 [令和6(2024)年3月調査]」報告書 p.34.

(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yorochosa/pdf/94111701_03.pdf)

この調査では「電子書籍を含みます」という設問になっているが、「若者」に限らず、少なくとも 20 年近く前から一定割合の日本人は〈個人・黙読〉の読書はしていないのである。「近年の」「スマートフォンによる」「若者」の活字離れは、自明のことではない。2023 年の調査結果では、読まないは 62.6%と過去 3 回の調査よりも高く出ているが、2008 年以降、5 割近くの日本人が一月に一冊も本を読んでいない。

また稲田は、飯田一史の『『不読率 60%の衝撃』？結論ありきの『本離れ』論のデタラメ』⁷という記事も紹介し、一定割合の日本人が一月に一冊も活字の本を読まないという「その傾向はもはや 60 年は続いている。」(稲田 2026 : 66) と指摘している。

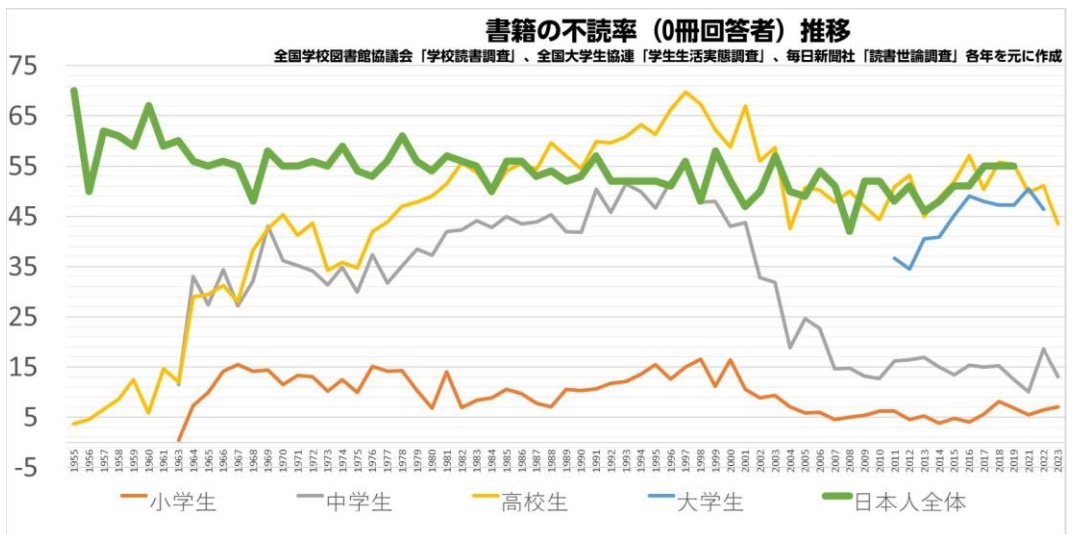


図2 書籍の不読率推移（飯田一史氏作成）

出典：飯田一史『『不読率 60%の衝撃』？結論ありきの『本離れ』論のデタラメ 令和5年度国語に関する世論調査を読む』ヤフーニュース エキスパート

査を読む』ヤフーニュース エキスパート

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yorinchosa/pdf/94111701_03.pdf

（最終閲覧日：2026年7月31日）

図2をみると2011年以降、高校生、大学生、日本人全体は不読率の傾向に大差がないが、中学生の不読率はむしろ下がる傾向にある。

また、図3は「令和5年度国語に関する世論調査」の「1か月に読む本の冊数」がゼロの人の割合を年代別に示したもののだが「若者だけが」読んでいないと言えるだろうか。後に第5節で論じるように、「活字離れ」を世代固有の現象とみなす見方そのものも見直す必要があるだろう。

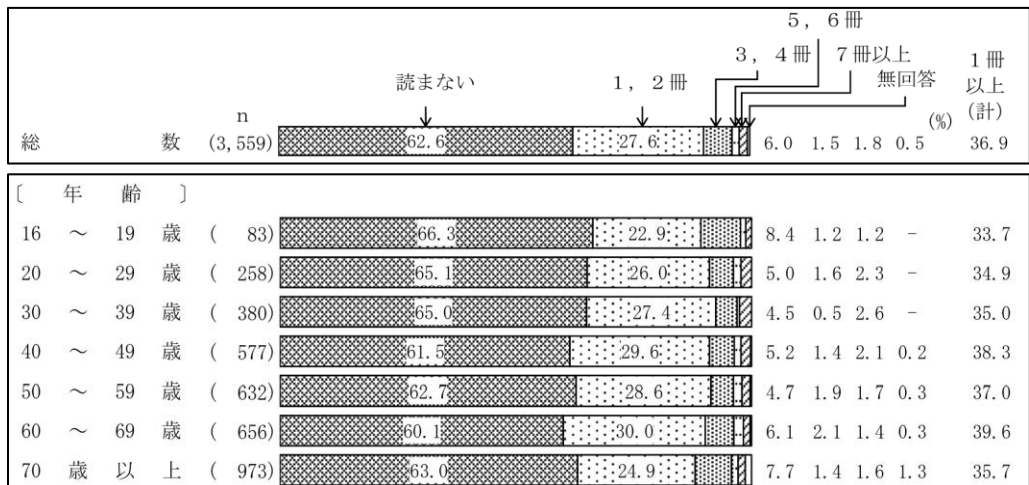


図3 1か月に読む本の冊数（年齢別）

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査〔令和6（2024）年3月調査〕」報告書 p. 35.

(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94111701_03.pdf)

「令和5年度 国語に関する世論調査〔令和6（2024）年3月調査〕」では、「本以外の文字・活字による情報を読む機会」の頻度についても質問している（図4）。

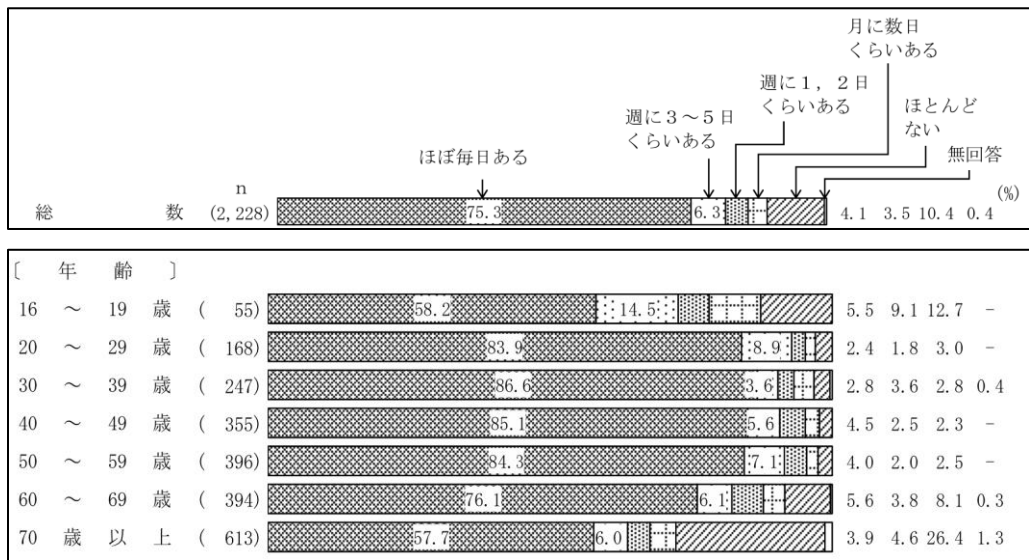


図4 本以外の文字・活字による情報を読む機会（年齢別）

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査〔令和6（2024）年3月調査〕」報告書 p. 36-37.

(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94111701_03.pdf)

図4は「1か月に1冊も本を「読まない」と答えた人（全体の62.6％）に、「本以外の文字・

活字による情報（SNS、インターネット上の記事などを含む）を読むことが、どのくらいあるかを尋ねた」⁸結果である。「ほぼ毎日ある」が75.3%いるのである。

同調査には、「あなたの読書量は、以前に比べて減っていますか。それとも、増えていますか。」という設問もあり、「読書量は減っている」「読書量はそれほど変わっていない」「読書量は増えている」の三択で回答する形式となっている。図5をみると、回答者全体の69.1%が「読書量は減っている」と答えている。年齢別では20代で「減っている」と答えた割合が最も低く57.0%。年代が上がるにつれて「減っている」回答の割合が高まる。本設問の、2008年以降の回答は表1の通り。

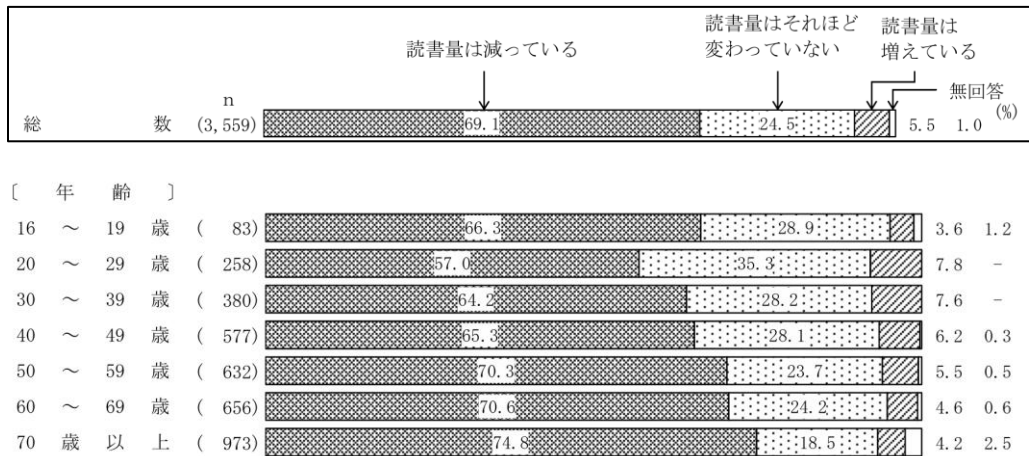


図5 読書量の変化（年齢別）

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査【令和6（2024）年3月調査】」報告書 p. 41-42.

(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94111701_03.pdf)

（参考：過去の調査結果）表13 読書量の変化						
	n	読書量は減っている	読書量はそれほど変わっていない	読書量は増えている	無回答	(%)
令和5(2023)	3,559	69.1	24.5	5.5	1.0	
平成30(2018)*	1,960	67.3	24.3	7.1		1.2
平成25(2013)*	2,028	65.1	26.3	7.4		1.2
平成20(2008)*	1,954	64.6	25.3	8.6		1.4

* 令和元年度以前の調査結果は面接聴取法によるもの。令和5年度調査（郵送法）とは調査方法が異なるため、参考値として示している。
表中の斜線の項目は、該当年度の調査では尋ねていない、又は選択肢がないなど、値が存在しないもの。

表1 読書量の変化（経年）

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査【令和6（2024）年3月調査】」報告書 p. 41.

(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94111701_03.pdf)

5年ごとに「読書量は減っている」が増え、「読書量は増えている」が減っている。
加えて本調査では、「読書量は減っている」と答えた人に「あなたの読書量が減っているのはなぜですか。この中から二つまで選んでください。」と聞き、下記表2に示す選択肢で答えさせている。

(参考：過去の調査結果) 表 14 読書量が減っている理由														(%)
	n	情報機器（携帯電話、スマートフォン、タブレット、パソコン、ゲーム機等）で時間が取られる *2	仕事や勉強が忙しくて読む時間がない	視力など健康上の理由	テレビの方が魅力的である	読書の必要性を感じない	魅力的な本が減っている	近所に本屋や図書館がない	良い本の選び方が分からない	読みたい本が電子書籍でしか読めない	学校での読書指導が十分でない	その他	無回答	分からない
令和 5 (2023)	2,458	43.6	38.9	31.2	19.8	8.5	7.7	6.0	4.6	0.6	0.2	6.2	0.2	
平成30(2018) *1	1,320	36.5	49.4	37.2	18.6	4.8	6.7	5.0	4.5		0.7	3.0		0.2
平成25(2013) *1	1,320	26.3	51.3	34.4	21.8	6.6	8.5	3.8	3.6		0.5	5.4		0.2
平成20(2008) *1	1,263	14.8	51.2	36.7	25.0	6.6	7.8	3.0	5.5		0.7	5.1		0.4
*1 令和元年度以前の調査結果は面接聴取法によるもの。令和5年度調査（郵送法）とは調査方法が異なるため、参考値として示している。 表中の斜線の項目は、該当年度の調査では尋ねていない、又は選択肢がないなど、値が存在しないもの。 *2 平成20年度調査は「携帯電話やパソコン、ゲーム機などで時間が取られる」、平成25、30年度調査は「情報機器（携帯電話、スマートフォン、タブレット端末、パソコン、ゲーム機等）で時間が取られる」														

表 2 読書量が減っている理由

出典：「令和5年度 国語に関する世論調査 〔令和6（2024）年3月調査〕」報告書 p.43.
(https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/94111701_03.pdf)

2008年度調査では「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」が51.2%と最も高く、「視力など健康上の理由」が36.7%、「テレビの方が魅力的である」が25.0%。この3項目の割合が高い傾向は2018年度まで続き、「情報機器（携帯電話、スマートフォン、タブレット、パソコン、ゲーム機等）で時間が取られる」が徐々に増え、ついに2023年度に「読書量が減っている理由」1位（43.6%）となる。「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」も依然として約4割が理由として挙げている。注目すべきは、「読みたい本が電子書籍でしか読めない」という項目が2023年度にできたことである。また、本調査では別途「電子書籍の利用」についての設問を設けており、本調査が対象とする「読書」は基本的に〈紙・個人・黙読〉を前提としたものだということがわかる。

3-2 読書装置研究の系譜

第二の系譜は、読書を、読み手の内面の営みとしてではなく、それを可能にする物質的・制

度的な装置との関係において捉えようとする研究である。

矢口博之・植村八潮は、「教育利用から見た読書装置の特性に関する実証的考察」において、紙と電子という支持媒体の違いに着目し、それぞれを「読書装置」として捉えてその特性を比較した。ここでの「読書装置」は、テキストを担う物理的な媒体を指す概念であり、読書という行為が、どのような媒体を介してなされるかによって異なる性格を持つことを示している(矢口・植村 2006 : 147-164)。

より広く、制度や実践を含めて読書装置を論じたのが新藤雄介である。新藤は『読書装置と知のメディア史』において、近代日本の図書館、文庫、読書会といった仕組みを「読書装置」として捉え、書物をめぐる多様な実践を歴史的に跡づけた。とりわけ注目されるのは、新藤が「読んでいないが知っている」という「潜在的読書」の存在を正面から論じ、「書物を読む」という行為を相対化した点である。ある書物が、実際に読んだ者の数をはるかに超えて社会に影響を及ぼすという事態は、読書が個人の読解行為にとどまらないことを示している。

本稿は、これらの読書装置研究から多くを引き継ぐ。とりわけ新藤の「潜在的読書」概念は、本稿が後に社会の層を論じる際の重要な足がかりとなる。だが同時に、本稿はこれらの研究とは分析の軸を異にする。矢口・植村が紙と電子という二項の比較にとどまり、新藤が読書装置の変遷を近代という時間軸に沿って通時的に描いたのに対し、本稿が照準するのは、複数の装置が現在という一時点において共時的に併存している事態である。この差異については、節をあらためて述べる。

3-3 リテラシー調査と「常識」の構成

近代日本において読み書き能力がどう測られてきたかを跡づけた増田(増田 2026)が論じるように、明治期の自署率調査から、戦後の大規模な読み書き能力調査、そして現代の PISA・PIAAC にいたるまで、日本人のリテラシーは繰り返し測定の対象とされてきた。なかでも 1948 年の調査は、日本人の非識字率がきわめて低いことを示したとされ、「日本人の識字率が高い」という認識の有力な根拠とされてきた。しかし横山詔一らは、『日本人の読み書き能力』(1951)における非識字率の再検討において、この“常識”そのものに疑問を呈した(横山ほか 2022 : 11-28)。

横山らによれば、当該調査のテストには難易度の統制や多肢選択形式に起因する問題があり、低い非識字率という結論を額面どおりに受け取ることにはできない。多肢選択形式では確率的にゼロ点を取る可能性は低い。ただし当時の日本人が 2026 年現在の日本人のように「確信の持てない回答でもマークしておく」という態度を身に着けておらず、確信が持てない場合は、多肢選択方式であっても回答していない可能性もある。

「日本人の識字率が高い」という広く流通した認識は、テストの設計という測定の枠組みが生み出した産物でもあったのである。角知行が「識字神話」と呼んで問い直したのも、こうした、検証を経ずに受容された識字をめぐる“常識”である(角 2012 : 63-68)。

ここに、第一の系譜(活字離れ言説)との構造的な共通性が浮かび上がる。「日本人の識字率が高い」という“常識”が測定の様式の産物であったように、「若者は本を読まない」という“常

識”もまた、読書をどう測り、どう定義するかという枠組みの産物である。測定や定義の仕方が結果を構成し、その結果が“常識”として流通し受容される——三つの系譜は、この同型の構造において結びつく⁹。

以上の三つの系譜を踏まえて本稿が継承するのは、第一に、清水や横山が示した「測定・定義が“常識”を構成する」という批判的な視点である。本稿は、この視点を「活字離れ」言説の批判にとどめず、「読書」という概念の定義そのものにも適用する。第二に、矢口・植村や新藤が切り開いた、読書を装置との関係において捉える視座であり、とりわけ新藤の「潜在的読書」概念を引き継ぐ。

他方、本稿がこれらの先行研究を越えようとするのは、次の点においてである。第一に、先行研究の多くは、読書装置を紙と電子の二項で、あるいは近代という時間軸に沿って通時的に捉えてきた。これに対し本稿は、紙・電子・音声・社会という複数の装置が、現在という一時点に共時的に積層している事態—読書の重層性—に照準する。第二に、先行研究は読書の定義を多くの場合暗黙の前提としてきたが、本稿はその定義そのものを問いに付し、再定義へと進む。この共時的な「読書の重層性」という視座と、それに基づく読書の再定義こそが、本稿が先行研究に対して提起する新たな理論的枠組である。次節では、まず「読書の重層性」の内容を詳述する。

4. 「読書の重層性」という視座

4-1 「装置」から「重層性」へ

現代では、同一の読者が、紙の書物を黙読し、スマートフォンやタブレット端末で、電子書籍を読み、通勤中に同じ作品をオーディオブックとして聴き、WEB サイトや SNS 上で他者の引用や書評を読み、あるいは動画共有サイト（You tube など）や読書会で語られる本を「聴いて知る」。これらは物質性・時間性・共同性・身体性も異なる別個の様式でありながら、排他的ではなく併存し、絡み合っている。本稿ではこの併存的な状態を「読書の重層性」と呼ぶ。

読書の層的なありようを捉える概念としては、アガンベンの「装置（dispositif）」（フーコーからの継承・発展）が想起されよう（アガンベン 2006：84・85）。装置は、諸々の要素が一つの布置として結びつき、人の経験を方向づけるという点で、本稿の関心と通じるところがある。ただし装置が、ある戦略のもとに構築された配置を含意するのに対し、本稿が捉えたいのは、誰かが構築したのではなく、現象として生じている多層化そのものである。そこで本稿は、より記述的な概念として「読書の重層性」を採用する。

用語を整理しておきたい。本稿では、紙・電子・音声・社会といった個々の様式を、テキストとの接触を可能にする物質的・制度的な布置という意味で「読書装置」と呼ぶ。この語は、すでに矢口・植村（矢口・植村 2006）が紙と電子の支持媒体を指して、また新藤が図書館や読書会といった近代の制度を指して用いてきた（新藤 2024）。

では、各層は何が異なるのか。本稿は、物質性・時間性・共同性・身体性という四つの軸から、各読書装置の固有性を記述する。物質性とは支持媒体の手触りや空間的な定位を、時間性

とは読みが線形か断片的か、また読者がその速度を制御できるか否かを、共同性とは読みが一人での営みか他者と共有される営みかを、身体性とは目・耳・手（指先の触覚など）のいずれがどのように動員されるかを指す。以下では紙・電子・音声・社会の各層をこの四軸に照らし、それらがたがいに置換不能でありながら、一人の読者のうちに併存するさまを示す。なお本章は、各層を優劣においてではなく差異において記述する。「深い読書」がもつ固有の価値については、結論であらためて論じる。

4-2 紙の層—定位する物質性と要求される身体

紙の書物において、テキストは物理的な重みと厚みを持つ。読者は全体の分量を手の重みとして把握し、いま読んでいる箇所が全体のどのあたりかを、残りの紙束の厚みによって空間的に把握する。ページをめくる、付箋を貼る、余白に書き込むといった操作は、読みの痕跡を物体の上に蓄積させる。この空間的な定位と痕跡の蓄積が、紙の層に固有の物質性である。

読書科学の領域では、この物質性が理解や記憶に与える影響が実証的に検討されてきた。アン・マンゲン (Anne Mangen) らは、同一のテキストを紙と画面で読ませた比較実験において、紙で読んだ群が筋立てや内容の記憶において優れていたことを報告している (Mangen et al.2013:61-68)。また、長文の説明的テキストの理解は画面より紙において強いという知見は、その後のパブロ・デルガルド (Pablo Delgado) らのメタ分析によっても支持されている (Delgado et al.2018 : 23-38)。

本稿はこれらを、紙という層がもつ固有の特性として記述する。どの層が「優れているか」という規範的な問いは、ここではいったん留保する。

ただし、この物質性は同時に、特定の身体能力を読者に要求する。本を持つ、ページをめくる、一定の姿勢を保つ、書店や図書館へ赴く——これらは「読書」の自明の前提のように見えて、実はある身体のある方を標準とした要求である。芥川賞作家の市川沙央は、重度の障害をもつ当事者として、この前提を鋭く問うた。小説『ハンチバック』において、主人公は紙の本を読む文化が暗黙に求める複数の健常性——視覚、書物を保持する力、ページをめくる動作、読書姿勢の維持、書店への移動——を「マチズモ」として告発する (市川 2023 : 27)。市川自身もインタビューで、読書における困難として書物の入手と管理を挙げ、移動の障壁と並べて「本の重さのバリア」を指摘している¹⁰。

誰もが、加齢・病気・事故などで近代的読書モデルが想定した〈紙・個人・黙読〉を実行することができなくなる可能性を持つ。そうなった場合に、電子や音声で「テキストの内容を受け取り、それについて思考する」ことを「読書」ではない、と言われたら反論したくなるのではないだろうか。紙の層の物質性は中立的な所与ではなく、それを享受できる身体を選別する。この事実、紙以外の層を「読書」として認めるべき積極的な理由を与える。

4-3 電子の層—可搬性と非定位

電子書籍やウェブ上のテキストにおいて、テキストは支持媒体から切り離され、複数の端末を移動する。一台の端末に膨大な蔵書が収まり、検索によって任意の語へ即座に到達できる。

この可搬性と検索可能性は、紙の層にはない固有の利点である。

他方で、電子の層ではテキストの空間的な定位が失われる。スクロールによって連続的に流れる画面の上では、「全体のどこを読んでいるか」という感覚が希薄になり、読みは断片化しやすい。紙が、テキストの長さや位置についての視覚的・触覚的で固定された手がかりを与えるのに対し、画面は一度に一ページ分しか示さず、テキスト全体への見通しを与えにくい。それゆえ読み手のテキストの心的地図が乱され、理解や記憶が妨げられうると、読書科学の領域でマンゲンらは論じている¹¹。また、同じ端末上に通知やリンクが共存することは、読みを中断と分岐へ誘う。電子の層は、可搬性と接続性を得るのと引き換えに、紙の層がもっていた定位を手放している。この層において読者は、しばしば速読・拾い読みへと傾く。複数のテキスト断片を横断的に渉猟する読みの様式となる。

4-4 音声の層—耳で受容する読みと制度

オーディオブックや読み上げ機能において、テキストは音声へと変換され、耳によって受容される。ここでの最大の特性は時間性にある。紙や画面では読者が読みの速度を制御し、立ち止まり、読み返すことができるのに対し、音声の読みは原則として発話の時間に拘束される。読者は再生速度を調整できるが、テキストの上を自在に往復することは難しい。

そのかわり、音声の層は身体を解放する。歩行中、運転中、家事の最中といった、目と手がふさがれた状況においても読みを成立させる。視覚と手指を前提とする近代的読書モデルにおいては、こうした受容はそもそも「読書」として数えられてこなかった。だが、テキストの内容を受け取り、それについて考えるという点において、音声の読みは紙や画面の読みと連続している。この層が例外でないことは、制度の存在が示している。視覚障害者等のための録音図書は、1990年代に DAISY (Digital Accessible Information System) として国際標準規格となり、CD で点字図書館や公共図書館から貸し出され、サピエ図書館のサイトからダウンロードして利用されている。日本点字図書館（東京都新宿区高田馬場）では、触覚によって読む点字利用者は近年むしろ少数であり、音声によって読む利用者が多数を占める¹²。さらに 2019 年に成立した読書バリアフリー法（視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）は、電子書籍や音声をはじめとするアクセシブルな読書環境の整備を国と地方公共団体の義務として明記した。音声の層は、私的な便宜であるにとどまらず、「読書」として公的に位置づけられた制度的実在なのである。なお、点字に代表される触覚の読みは、視覚に依存しない精読が成立しうることを示している。点字ディスプレイ（電子ペンで点字を表示する装置）は「深い読み」が紙と視覚に固有のものだという通念を問い直す。

4-5 社会の層—流通し語られる読み

第四の層は、読みが他者との関係のなかで成立する局面である。紙媒体やインターネット上の書評、SNS 上の引用や感想、輪読、読書会——テキストは、個人が黙して向き合う対象であると同時に、他者へ語られ、他者から聴かれることで流通する対象でもある。この社会の層において、テキストはしばしば本体を読まれることなく、その要約や批評の形で受容される。

新藤が「潜在的読書」と呼んだ事態、すなわち「読んでいないが知っている」（新藤 2024 : 37）という関係は、まさにこの層において生じる。ある書物が、実際に通読した者の数をはるかに超えて社会に影響を及ぼすとき、そこではこの社会の層が作動している。新藤はこれを大佛次郎の体験、カール・マルクスの『資本論』、トマ・ピケティの『21 世紀の資本』を引きながら、また近代の図書館や読書会という制度にも即して通時的に描いたが、本稿が照準するのは、その社会の層が現在どのような装置を得て作動しているか、という共時的な局面である。

現代において潜在的読書を最も大規模に生産しているのは、書評サイトや紹介動画サイトであろう。読者は数分から十分程度テキストを読んだり、動画を視聴したりするだけで、一冊を読まずにその内容の主旨と評価を「知る」ことができる。これは社会の層の現代的な現れであると同時に、稲田が論じた、限られた時間と労力のなかで効率（コスパ・タイパ）を求める受容のありようとも重なる（稲田 2026）。輪読や読書会もまた、この層に属する。とりわけ読書会は、新藤が近代の読書装置として論じた対象そのものであり、それが現在もなお——対面でも、オンラインでも——テキストを共同的に読む実践として続いている。歴史的な読書会から現代の紹介動画まで、社会の層は形態を変えながら持続し、近代的読書形式が前提した〈孤独な個人〉という単位を、繰り返し問うてきたのである¹³。

以上の「紙・電子・音声・社会」の四つの層は、たがいに置換不可能な固有性をもちながら、排他的に存在するのではない。今日の読者は、同一の関心のもとで、これらの層を行き来する。同一の書物を紙で精読したり、音声で聴いたり、その感想を WEB サイトや SNS に記し、書評会で語る。あるいは、SNS で評判を知った書物を電子で拾い読みし、結局は紙で通読したりもする。層から層への移動は日常的であり、ある層での読みが他の層での読みを呼び起こすこともある。

この複数の読書装置が一人の読者のもとに共時的に積層し、たがいに関連しあう事態こそ、本稿が「読書の重層性」と呼ぶものである。重要なのは、これが誰かによって設計された体系ではなく、メディア環境の変化のなかで現象として生じている多層化だという点である。

5. 「読書」の再定義に向けて

ここまでの考察から、「読書」をある単一の行為として定義することの困難が明らかになった。紙の黙読も、画面の拾い読みも、音声の聴取も、書評会での語りと聴取も、たがいに置換できない固有性をもちながら、いずれも「テキストの内容を受け取り、それについて思考する」という点で連続している。これらを「読書」と呼び、あれを「読書でない」と切り分ける境界線は、テキストとの関わり方の内側にあるのではなく、どの装置を正統とみなすかという、外から与えられた約束にある。

デジタル読書が読解に及ぼす影響については、デルガードらが、紙と画面で同等のテキストを読んだ場合の読解を比較した多数の研究をメタ分析し、全体として紙媒体のほうが読解に有利であることを示している。ただしデルガードらは、デジタル機器を避けることを現実的な提言とはみなしていない（Delgado et al.2018）。

読書を多層的な実践として捉え直す視座は、本稿だけのものではない。文学研究の領域において、N・キャサリン・ヘイルズ(N. Katherine Hayles)は、精読・ハイパーリーディング・機械読みという複数の読みを、優劣ではなく相補的なものとして捉えたうえで、次のように述べていた。「読書は、つねに複雑で多様な実践を通じて構成されてきた。いまこそ、二一世紀のリテラシーの環境をかたちづくる、言葉とイメージ、音とアニメーション、図像と文字の豊かな混合のなかで、読書とは何か、そしてそれがどのように働くのかを、問い直すときである」(Hayles2010: 78)。本稿の試みも、この問い直しを、文学研究の方法をめぐる議論としてではなく、現代の読書という現象そのものの水準で引き受けるものにほかならない。

そこで本稿は、読書を次のように捉え直すことを提案する。読書とは、特定の物質的形態に固有の行為ではなく、複数の読書装置との関係のなかで成立する、多層的で連続的な実践である。紙の本を黙読することは、この連続体の一つの形式であって、その全体ではない。読書を単一の点としてではなく、層の広がりをもつ領域として捉えること——これが「読書の重層性」という視座の含意である。

この再定義は、読書の輪郭を曖昧にして何でも読書だと言いくるめるものではない。むしろ逆である。各層が物質性・時間性・共同性・身体性において何を可能にし、何を要求するのかを記述することで、これまで「読書」という一語のもとに無自覚に束ねられていた差異を、はじめて分節して見ることができる。再定義とは、境界を消すことではなく、境界の引かれ方そのものを問題として扱うことなのである。

この視座から振り返るとき、「活字離れ」という言説は異なって見えてくる。

第3節で確認したように、「活字離れ」を測る各種の調査は、多くの場合「紙の本を一定量読むか」を指標としてきた。だが、もし読書が紙の本の黙読に限定されない多層的な実践であるなら、紙の本の冊数の減少は、読書一般の減少を意味しない。それはむしろ、読みが他の層へ移動し、層の構成が変化したことの一側面でありうる。画面で読み、音声で聴き、紹介動画で知り、書評会で語る——これらが「読書」として数えられないとき、人は「読まなくなった」と記述されるが、それは現象の記述ではなく、古い定義がもたらすバイアスである。

ここで、横山らが1948年調査の非識字率について示した知見(第3節)が想起される。「日本人の識字率は高い」という“常識”が、テストの設計という測定の枠組みの産物であったように、「若者は本を読まなくなった」という“常識”もまた、読書の狭い定義という枠組みの産物である。測定の様式が結果を構成し、その結果が“常識”として受容される——清水が「活字離れ」言説について論じたこの構造(清水2014)を、本稿は読書の定義そのものへと遡って示したことになる。加えて、稲田が紹介するように、一か月に一冊も本を読まない層は、この60年ほど半数前後を占めつづけており、直近では約6割にのぼる(稲田2026)。もしそうであれば、「かつては皆が読んでいたのに、いまの若者は読まなくなった」という世代論的な物語は、その前提を欠く。読まない層はつねに一定の規模で存在してきたのであり、変化したのはその規模というより、読みうる人々が用いる装置の構成である。「活字離れ」は、若者という特定世代に固有の墮落ではなく、メディア環境の構造的な変化として捉え直されるべきもののなのである。

本稿は、「何を読書と呼ぶのか」という問いから出発した。「活字離れ」をめぐる議論が、し

ばしば〈紙・個人・黙読〉という近代に成立した特定の定義を暗黙の前提としてきたのに対し、本稿は読書を歴史的に構築された実践として捉え直し（第2節）、その定義と測定が“常識”を構成してきた過程を先行研究に即して跡づけた（第3節）。そのうえで、現代の読書が紙・電子・音声・社会の各層に分散・併存している事態を「読書の重層性」として概念化した（第4節）。これらを踏まえ、読書を複数の装置との関係のなかで成立する多層的・連続的な実践として再定義し、「活字離れ」が読書の狭い定義の産物であり、世代に固有の現象ではなく構造的な変化であることを示した（第5節）。

ただし、読書を多層的に捉え直すことは、すべての層が等価であるとか、いずれの読みも同じだと主張することではない。本稿が各層を優劣ではなく差異において記述してきたのは、まさにこの最後の論点を正確に述べるためである。読書科学の成果が示すように、紙の層における持続的で線形的な読み——いわゆる「深い読書」——は、長文の理解や記憶において固有の強みをもつ（Mangen et al.2013 ; Delgado et al.2018）。この能力は、生得的に備わるものではなく、訓練によって培われ、用いなければ衰える。メアリアン・ウルフが「バイリテラシー脳」と呼んだのは、デジタル時代の速く断片的な読みと、それ以前の深くじっくりとした読みの双方をいずれも手放すことなく育てる構えであった（ウルフ 2020 : 228-229）。

したがって、読書の重層性を認めることと、深い読書の価値を重んじることは、対立しない。むしろ前者は後者の前提となる。読書の全領域を地図として描いて初めて、深い読書がその地図のなかで占める固有の位置と価値とを、正確に示すことができるからである。読書バリアフリー法（2019）が電子や音声を含む読書環境の整備を国の責務としたように、読書の裾野を多層的に広げることと、深い読書という一つの様式を意識的に育てることとは、両立しうる——いや、両立させなければならない。「活字離れ」という喪失の物語に立ち止まるのではなく、重層化した読書の全体を見渡した上で、その中のどの読みをどう育てるかを問うこと。それが、本稿の再定義がひらく次の課題である。

本稿は「読まない」ことをめぐる定義の問題を扱ったが、それは「本を買わない」こと、すなわち書物の購買・流通・所有という経済的な層の問題とは区別される。「読んでいないが知っている」という潜在的読書が、この経済的な層とどのように関わるのかは、稿を改めて論じたい。また、紙の点字や音声による読書については、本稿では読書の重層性を示す一事例として簡潔に触れるにとどめた。これらを支える制度や実践の詳細な検討は本稿の範囲を超えるが、読書を多層的に捉え直す視座が、そうした領域にも開かれていることは指摘しておきたい。

註

- 1 『『雑高』のかげり』朝日新聞. 1987 年 4 月 17 日, 夕刊, 1 面。
- 2 「WHAT 入学試験⑤ 論文の関門 若者の活字離れに対抗」読売新聞. 1984 年 1 月 21 日, 朝刊, 11 面。
- 3 〈紙・個人・黙読〉という近代的読書形式の歴史的成立については本稿第 2 節で詳述する(前田 2001 ; 永嶺 2023)。
- 4 「読書の重層性」は本稿の鍵概念である。先行する「読書装置」概念(矢口・植村 2006 ; 新藤 2024)との関係は第 4 節で論じる。
- 5 本稿では「近代」という語は、文脈に応じて二つの水準を指す。第一に、活版印刷の普及とともに近代的な読者・読書様式が成立したヨーロッパ近代(おおむね 15～18 世紀)を指す場合があり、香内やシャルティエ＝カヴァッロの議論はこれにあたる。第二に、日本における近代、すなわち明治維新(1868 年)以降を指す場合があり、前田・永嶺や識字調査をめぐる議論はこれにあたる。
- 6 文化庁「国語に関する世論調査」各年度、公益財団法人 全国学校図書館協議会「学校読書調査」各年度、公益財団法人 全国出版協会・出版科学研究所『出版指標年報』を参照。
- 7 飯田一史『「不読率 60%の衝撃」？結論ありきの『本離れ』論のデタラメ 令和 5 年度国語に関する世論調査を読む』ヤフーニュース エキスパート、2024 年 9 月 18 日
<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/39d397c9aaf8816f1c9d87f3f02807356e9eb38b> (最終閲覧日 : 2026 年 7 月 31 日)
- 8 「令和 5 年度 国語に関する世論調査 [令和 6 (2024) 年 3 月調査]」報告書 pp. 36-37。
- 9 なお、本稿はここで一点、自らの研究も省みておきたい。増田(2026)は『「読み書き能力」をめぐる基礎的考察 明治・昭和の識字率調査と OECD 調査から』という研究発表報告の中で、1948 年調査の低い非識字率を、ひとまず所与の事実として扱っていた。本稿は、横山らの再検討を踏まえ、その数字自体を測定の産物として捉え直す立場をとる。先行する自らの記述を更新することもまた、“常識”を問い直すという本稿の姿勢の一部としたい。
- 10 横山耕太郎『『この社会に障害者はいないことになっている』芥川賞・市川沙央が語った 10 の言葉』Business Insider Japan、2023 年 9 月 14 日。<https://www.businessinsider.jp/article/275149/> (最終閲覧日 : 2026 年 7 月 31 日)
- 11 Mangen et al. 2013. ただし、Mangen らは、光を発する LCD 画面(パソコン・タブレット)と、光を反射するだけの電子インク画面(電子ペーパー、Kindle や Kobo など)では視覚的な負荷が違い、「画面

が不利」と出たのは、LCD 画面による可能性もあり、電子インク端末なら結果は違うかもしれない、という含みを持って論じている。

12 社会福祉法人 日本点字図書館 総務部総務課に対面インタビュー、2025 年 10 月 31 日。

13 社会の層と重なりつつ区別されるべきものとして、読みが語りの実演として遂行される局面がある。読者が読んだ書物について人前で語り、その語りが他者の読みを触発する一メディア環境の変化ではなく人為的に設定された「ビブリオバトル」という書評ゲームはこの遂行だろう。2007 年、谷口忠大が考案したビブリオバトルでは、参加者が人に薦めたい一冊を持ち寄り本の魅力を紹介し合う。詳しくは、谷口忠大（2013）。近代的読書形式が想定した〈紙・個人・黙読〉の対極に遂行がある。

引用文献

アガンベン、ジョルジョ（2006）「装置とは何か」高桑和巳訳、『現代思想』2006 年 6 月号、青土社、pp. 84-96.

ウルフ、メアリアン（2008）『プルーストとイカ——読書は脳をどのように変えるのか?』小松淳子訳、インターシフト.

ウルフ、メアリアン（2020）『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳——「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』大田直子訳、インターシフト.

市川沙央（2023）『ハンチバック』文芸春秋.

稲田豊史（2026）『本を読めなくなった人たち——コスバとテキストメディアをめぐる現在形』中央公論新社.

シャルティエ、ロジェ／カヴァッロ、グリエルモ（2000）「序章」田村毅・浦一章訳、シャルティエ、ロジェ／カヴァッロ、グリエルモ編『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店、pp. 3-32.

香内三郎（2004）『「読者」の誕生——活字文化はどのようにして定着したか』晶文社.

清水一彦（2014）『「若者の読書離れ」という“常識”の構成と受容』『出版研究』45 号、pp. 117-138.

シャルティエ、ロジェ（2000）「読書と『民衆的』読者——ルネサンスから古典主義時代まで」大野英二郎訳、シャルティエ、ロジェ／カヴァッロ、グリエルモ編『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』大修館書店、pp. 387-406.

新藤雄介（2024）『読書装置と知のメディア史——近代の書物をめぐる実践』人文書院.

増田芽衣

角知行 (2012) 『識字神話をよみとく——「識字率九九%」の国・日本というイデオロギー』 明石書店.

谷口忠大 (2013) 『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』 文芸春秋.

永嶺重敏 (2023) 『〈読書国民〉の誕生——明治三〇年代の活字メディアと読書文化』 講談社.

前田愛 (2001) 『近代読者の成立』 岩波書店.

増田芽衣 (2026) 「『読み書き能力』をめぐる基礎的考察——明治・昭和の識字率調査と OECD 調査から」『東海大学紀要文化社会学部』 15 号、pp. 263-273.

矢口博之・植村八潮 (2006) 「教育利用から見た読書装置の特性に関する実証的考察」『出版研究』 37 号、pp. 147-164.

横山詔一・相澤正夫・久野雅樹・高田智和・前田忠彦 (2022) 「『日本人の読み書き能力』(1951)における非識字率の再検討——テストとしての問題点を中心に——」『基礎教育保障学研究』 第 6 号、pp. 11-28.

Delgado, Pablo, Cristina Vargas, Rakefet Ackerman and Ladislao Salmerón (2018) “Don’ t throw away your printed books: A meta-analysis on the effects of reading media on reading comprehension,” *Educational Research Review*, vol. 25, pp. 23-38.

Hayles, N. Katherine (2010) “How We Read: Close, Hyper, Machine,” *ADE Bulletin*, no. 150, pp. 62-79.

Mangen, Anne, Bente R. Walgermo and Kolbjørn Brønnick (2013) “Reading linear texts on paper versus computer screen: Effects on reading comprehension,” *International Journal of Educational Research*, vol. 58, pp. 61-68.